

ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉

ばおぼぶ代表 五十嵐正人

第4回 ラーシュ・ケプレル 哲学の力によって

今回はカーリン・アルヴテグンの作品から、スウェーデンの社会福祉を困難な状態にさせている要因の一つを読み取ってみた。新自由主義の台頭である。今回はそれに対抗する手段を、スウェーデンミステリー小説の中に探してみたい。取り上げる作家はラーシュ・ケプレル。前回の復習を兼ねて、ケプレルが新自由主義について言及している一文の引用から見ていこう。

ウツレローケル精神科病院は一九九〇年代初め“精神科医療改革”と称して行なわれた大幅な経費削減にもかかわらず、いまなお運営されている。あの改革によって、数多くの精神疾患患者が、それまでずっと暮らしてきた施設を離れ、自力で生きていくことを強いられた。請求書の支払いなどしたことがなく、コンロや玄関の鍵の管理も自分でしたことのない彼らは、与えられた住居をたちまち失った。入院患者の数は減ったが、ホームレスが同じ勢いで増加した。やがて政府が新自由主義的な方向に傾き、大規模な経済危機が訪れ、気がついてみればどの県も、こうした人々をふたたびすくい上げる資金をもはや持ち合わせていなかった。

(『催眠』ヘレンハルメ美穂訳 ハヤカワ・ミステリ文庫)

「一九九〇年代初め“精神科医療改革”と称して行なわれた」ものは、1980年代から始まっていた大規模施設解体の流れの一環であろう。すなわち福祉の視点からいうならノーマライゼーションの実践だ。しかしそれは経済という側面からすれば「大幅な経費削減」と位置づけられている。やがて「入院患者の数は減ったが、ホームレスが同じ勢いで増加」した。そして「気がついてみればどの県も、こうした人々をふたたびすくい上げる資金をもはや持ち合わせていなかった」のだという。他人事ではない、日本の国でも十分に起こりえることだ。いや、すでに起こり始めているのかもしれない。その原因が「政府が新自由主義的な方向に傾き、大規模な経済危機が訪れ」たことにあるのなら、日本は同じ道を歩みつつあるのだから。

日本の社会福祉の改革は基礎構造改革の名の下に、障害福祉分野では措置制度から支援費制度への移行という形で実行された。現在の総合支援法に至る変革だ。そしてこの改革は新自由主義の視点で語るなら、公的に行なわれていた社会福祉分野への、民間事業者の参入を意味していた。規制緩和による民間活力の導入である。それは競争を生み出し、合理的かつ質の高い福祉の実現を謳っていた。しかし現実がかならずしもそうならないことは明白だろう。今年2024年になってからのニュースを拾い上げてみても、神奈川県の県立障害者支援施設「愛名やまゆり園」で入居者を骨折させた暴力事件、福島県の県社会福祉事業団が運営する「県けやき荘」で入居者にやけどを負わせた事件、大阪府のデイサービス「アルプスの森」での利用者への暴行で事業所

の代表らが逮捕と、後を絶たない。規制緩和による民間活力導入が、社会福祉の質の向上に成功したと言えないことは明らかだ。

ラーシュ・ケプレルの『交霊』(岩澤雅利・羽根由訳 ハヤカワ・ミステリ文庫)は過度な民間活力への依存がもたらした有り様を、次のように描いている。

エリザベトは、スツヴァル北部のビルギッタゴーデンにある、問題を抱えた少女のための自立支援ホームで看護師をしている。青少年支援の特別措置を定めたL V U法の一環として、十二歳から十七歳までの少女八人を預かる私立の専門施設である。

この施設に送られてくる少女の多くは薬物依存状態にあった。そしてほとんどの少女に、病的な自傷行為や拒食症といった自己攻撃的行動がみられた。なかにはきわめて粗暴な者もいる。

青少年更生施設では、通常、ドアに警報装置が取り付けられ、窓には鉄格子がはめられ、入所者の外出は制限される。そういう意味では、刑務所や精神科の強制入院病棟に近い。しかし、ビルギッタゴーデンは例外だった。ここは、在宅での治療のための準備という名目で少女たちを受け入れており、エリザベトは口癖のように、「ビルギッタゴーデンにやってくるのは心やさしい女の子ばかりだ」と言っていた。

エリザベトはブラックチョコレートの最後の一粒を口のなかで溶かし、舌を刺激するほろ苦い甘みを味わった。肩の緊張が少しずつほぐれてくる。

ビルギッタゴーデンを所有する福祉関連の企業がブランシュフォルト・ホールディングスの傘下に入ってから四ヵ月、夜勤スタッフの人数は減らされている。寮母は夕食後まもなく帰宅し、いまはスタッフで残っているのはエリザベトひとりだった。

『催眠』の引用にあった「やがて政府が新自由主義的な方向に傾き、大規模な経済危機が訪れ、気がついてみればどの県も、こうした人々をふたたびすくい上げる資金をもはや持ち合わせていなかった」ことの、具体例のような記述だ。

また『交霊』には、こんな科白もある。

「初めに言っておくけど、施設に収容される子どもは毎年一万五千人以上もいるわ。政治家が私企業の参入を認めたときは、福祉の多様化だとさかんに言われたものよ。だけどいまや、施設のほとんどが投資企業の所有なの。かつて貧しい家の子どもが競りにかけられて売り飛ばされたように、今度は入札金額のいちばん低い企業が福祉の仕事を請け負っている……。その結果、職員、教育、治療、歯のケアなどにかかる経費を節約して利益を上げるようになっているの」

「政治家が私企業の参入を認めたときは、福祉の多様化だとさかんに言われたものよ」という科白。基礎構造改革で障害福祉が支援費制度に移行した際に、日本でも散々語られていた宣伝文句だ。

さらには、こんな訴えも。

「準備に抜かりはない、とわたしたちは思っていた。多少の困難は予想してたけど……。あなたはこの国がどんな国かわかる？ つまり、最初は何もかもが念入りに計画されて、ソーシャルワーカーやいろいろな分野の先生との話し合いがあり、経済状態から性生活に至るまであらゆることを細かく調べられたのに、わたしたちが里親として認められるや、三日後にはもう世話をする子といっしょの暮らしがはじまったのよ。変だと思わない？ その子について何も教えてもらえなくて、何の支援も受けられなかったのよ」

これは里子を迎えた市民の発言として書かれている。里子を引き取るまではあれこれ介入していた行政が、里親としてスタートするやいなや何の支援もしなくなり……。これは里親制度には限らないことだろう。日本の社会福祉でいうなら、障害者グループホーム、放課後児童デイサービスなどの乱立に、同様の危険を見ることが出来る。認可の基準はそれなりに厳格なのだろうが、オープン後の行政の監視、介入は一気に小さくなる。もちろんしっかりとした理念をもって運営されている事業所はあるのだろうが、ホーム、デイサービスでの虐待事件も次々に起きている。規制緩和は民間事業所の参入を促しはしたが、開設された事業所及びその利用者を護ることについては、行政の無責任を誘発してしまったのではないだろうか。

スウェーデンにおける高福祉の危機的状況は、同様に新自由主義を迎え入れつつある日本でも起こりうることだ。スウェーデンのミステリー小説は、こんなにもはっきりと教えてくれている。

さて、それでは私たちには社会福祉を、すなわち福祉を必要としている人たちを護るために何か出来るのだろうか。そのヒントをラーシュ・ケプレルの作品から探してみよう。

ケプレルの一連のミステリー小説で、主人公を務めるのはスウェーデン国家警察のヨーナ・リンナだ。ヨーナは仲間達と様々な事件を解決していくが、その中で最大の敵として登場するのがユレック・ヴァルテル。最強のシリアルキラーともいうべき男だ。人の心を操り、目的のためには躊躇なく殺人を繰り返していく。そんなヨーナとユレックとの、現状においては最後の戦いになった作品が『墓から蘇った男』(品川亮訳 扶桑社文庫)だ。そのクライマックス部分に注目したい。若干ネタバレにもなりかねないので、引用は最小限にとどめることとする。

娘のルーミを人質にとられたヨーナは建物の屋上までユレックを追っていく。ユレックはヨーナの目前でルーミを屋上から落とそうとする。ヨーナはユレックの足を撃ち、娘を救出。サイレンの音も近づいている。後は逮捕をするだけだ。しかしヨーナは自分を抑えられなくなっていた。

ヨーナは結び目を広げながら、ユレックが出血性ショックの状態に陥りつつあることに気づく。

「私はすでに死んでいる」ユレックはそう言いながら、ロープを手で振り払う。

ヨーナがその手をつかんでねじり上げると、肘の骨が折れる。ユレックがうめき声を漏らす。そしてヨーナを見つめると、唇を湿らせる。

「深淵を覗き込む時、深淵もまたおまえの内側を覗き込む」ユレックはそう言いながら頭を動かし、結び目から逃れようと無駄なあがきをする。

一度はかわされたものの、ヨーナはその首にロープをかけおおせる。そして、ユレックの後頭部で結び目をきつく締め上げる。

この後、ヨーナはロープの端を支柱に結びつけ、ユレックを屋上から突き落とし、長かった戦いに終止符を打つのだ。

すでに瀕死の状態だったユレック。そして警官達もすぐ近くまできていた。国家警察に勤務するヨーナ・リンナがなすべき事はユレックの身柄拘束であるはずだ。しかし彼は自分をコントロールできなかった。その様子が引用部とその前後に書かれている。作者のラーシュ・ケプレルは引用の通り、細かく丁寧な描写で迫真のクライマックスを演出している。しかしそんな丁寧な描写の中に、一箇所だけ意味を取りづらい文章が紛れている。分かる人には分かるのだろう。しかし知らない人には、クライマックスを台無しにする意味不明な一文にもなりかねない。「深淵を覗き込む時、深淵もまたおまえの内側を覗き込む」という、ユレックの科白だ。

この作品を読んだ人の中で、この科白の出所を知る人はいったいどれほどいるだろうか。誰の何という書物に書かれていたのか。そしてその意味するところは。

おそらく日本の読者においては大半が知らないのではないだろうか。しかしスウェーデンの読者の多くは知っていると思われる。ドイツの哲学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチェの著作、『善悪の彼岸』に書かれている言葉なのだ。

手許にある木場深定訳の岩波文庫版から、それが書かれている「第四章 箴言と感想」の一四六章を抜き出しておこう。

怪物と戦う者は、自分もそのため怪物とにならないように用心するがよい。そして、君が長く深淵を覗き込むならば、深淵もまた君を覗き込む。

どうだろう、深淵を覗き込む事の意味を分かっていたただけだろうか。あの場面でユレックは「怪物と戦う者は、自分もそのため怪物とにならないように用心するがよい」と言っていたのだ。これを知っているかいないかで、クライマックスの鑑賞は大きく変わってくる。知らなければヨーナの行為は激昂にかられた一時的な行為としか思われなくてもいい。しかし深淵を覗き込む意味を知る読者は、ユレックという怪物との長く苦しい戦いに思いをさせ、みずからも怪物になろうとしているヨーナの姿を見るのである。

ここで私が注目したいのは、ユレックという殺人鬼がニーチェの科白を正確な意味のもとで理解しているという設定だ。ユレックは子どもの頃、満足に学ぶ機会を与えられていなかった。そんな彼が難解な哲学を理解していることに、スウェーデンの読者はおそらく違和感を感じてはいない。それどころか読者のほとんどが同様に哲学を理解しているように思われる。クライマックスで登場したニーチェの言葉は、けっして作者による知識のひけらかしのようなものではない。引用部の後には、突き落とされる前にユレックがヨーナの目を覗き込むシーンもある。ニーチェの科白はそこにも関わってくる重大なキーワードであり、とうぜん読者に伝わる前提で書かれた言葉だと理解するのが自然だろう。

『墓から蘇った男』にはこんな場面もある。

ユレック・ヴァルテルは、勾留期間中になにも自白しなかった。無実を訴えもしなかった。ただ、罪と罰の概念を脱構築する哲学的な議論を続けた。

これは収監されていた時のユレックのことだ。後に次々と人を殺しながら怪物ユレックは脱走する。「脱構築」はフランスのポスト構造主義の哲学者ジャック・デリダが好んで使った言葉で、デリダの代名詞ともいえる単語だ。それを知る者が読めば、この文章だけでユレックがどれだけ捜査官達を困らせたのかが想像できる。

哲学に知識があるのはヨーナ・リンナも同様だ。『鏡の男』（品川亮訳 扶桑社文庫）にこんな一文がある。

ヨーナは、哲学者のミシェル・フーコーの言葉を思い出す。真実とは、権力構造の一部ではない。むしろそれは、分ちがたく自由と結びついている。

ミシェル・フーコーはフランスの哲学者で、構造主義に分類されることが多い。ヨーナにしても特別に高学歴なエリート警官というわけではない。むしろ現場主義のタフな男だ。日本の感覚では哲学などからは遠い世界に生きているタイプの男である。そんな登場人物達が難解な現代哲学に精通しているということ。それに読者は違和感を感じず、そしておそらくは多くの読者がニーチェをデリダをフーコーをそれなりに認知しているということ。私はスウェーデンにおいて福祉サービスの利用者を護るキーワードが「哲学」にあるのではないかと読み取っている。とりわけニーチェ以降の哲学が、スウェーデンの高福祉を脅かす諸々の脅威にいち早く気が付くセンサーの役割を担っていると考えるのだ。

少し大雑把な言い方だが、欧米においてニーチェ登場以前の哲学はキリスト教を前提として考える学問だった。人間とは何か、人はどう生きるべきか、そんなことを議論している時でさえ、世界と人間の創造主たる神の存在が前提にあったのだ。「我思う故に我あり」といったルネ・デカルトでさえキリストを信仰していたほどである。

これに対してニーチェが「神は死んだ」と宣言して以降の哲学の流れには神の存在を前提としないものが生まれてきた。ニーチェが分類される無神論的実存主義やフーコーが分類される構造主義、デリダらのポスト構造主義などがそれだ。それらは多くの場合難解極まりない思考を展開するのだが、それはキリスト教のような土台を持っていないことが理由の一つだろうと私は考えている。土台の喪失した空間で哲学を展開するのは、無重力の宇宙空間で衛星を組み立てるような作業なのではないか。そこで新たな土台を言語学や文化人類学などの分野に求めて、各々の哲学思考を行なっているのだろう。そのため難解になりがちではあるのだが、彼らは「人間」を神が作ったものだという限定の外側で、自由に考えることが出来ている。このニーチェ以降の西洋哲学のスタイルが、スウェーデンミステリー小説の中には度々登場してくる。

ここに車椅子を利用しているA君がいるとしよう。彼は何者なのか。「人間である」、「両親にとっての息子である」など様々な答えが存在している。そんな中に現在の日本では「彼は障害者だ」という答えも紛れ込んでくるに違いない。これは社会福祉の制度内でのみ有効な解答であって、その外側においては誤答になるはずだ。障害者が定義されているのは障害者福祉の関係法の中であって、そこを離れた日常生活の場には適用されないのだから。周囲の人が、A君の車椅子を母親が押している姿を見た時、「親子だ」と思うのが正しい理解である。「障害児とその母親」と言う者がいたら、それは明らかな誤認である。にもかかわらず、この国では「障害者」という種類の人間が存在しているかのようにカテゴライズをしてしまう。障害者福祉関係法の中で貼ったラ

ベルが、その外側でも剥がされない。やがて障害福祉関係法はその外側までラベルを追いかけ、A君達の日常のすべてを覆い尽くすのだ。かつては「お母さんは息子を産んだ。成長するにつれて困難が増えて障害福祉制度を利用するために障害認定を受けた」であったのが、「お母さんは障害児を産んだ」に変化するのだろう。それほどまでに障害者福祉の制度は日本の社会に充満しつつある。

こうした状況を社会福祉という制度の内側で見ていると何の違和感も感じないかもしれない。むしろ、単純に良いことが実現されていると思うかもしれない。分け隔て無く障害者に福祉サービスが利用者に提供されていることが平等と認識されることだろう。

これに対して、社会福祉という制度の外側に位置する視点、すなわちA君を人間であるという視点から見ると、違和感だらけの社会が見えてくる。社会福祉の良い面だけではなく危険な側面も見えるだろうし、何よりも差別の様相がまったく異なってくる。社会福祉の中では「障害者を差別してはならない」だったのが外側からの視点では「人を障害者に差別してはならない」に置き換わるのだから。

この外側からの視点を可能にしているものが、ニーチェ以降の西洋哲学の素養だと思われる。

神が人間と人間の暮らす世界を想像したという前提と同じように、障害者はその時代時代の社会制度によって作られるに過ぎない。やはりニーチェ以降の哲学者シモーヌ・ド・ボーボワールの「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」という言葉を借りるなら、「人は障害者に生まれるのではない、障害者になるのだ」という具合に。

しかし問題は簡単ではない。「神は死んだ」と同様の宣言をしたなら、障害認定することで成立している障害福祉は消えてしまう。残念なことに現在の日本では、「障害者など存在しない、みんな同じ人間なのだ」を純粹に認めることは極めて危険なことなのだ。多くの人たちがケプレルの『催眠』の引用にあった「自力で生きていくことを強いられた。請求書の支払いなどしたことがなく、コンロや玄関の鍵の管理も自分でしたことのない彼らは、与えられた住居をたちまち失った」状況に追いやられることになる。おそらく望ましい状態は高福祉が実現されている社会を前提としながら、それを外側から監視し、高福祉社会が「人を障害者に差別してはいないか」をチェックし続けることにあるのではないか。その外側から監視する力を、スウェーデン社会はニーチェ以降の西洋哲学から得ているのだろう。それが私の読み取りだ。

第一回スティーグ・ラーソンの『ミレニアム』シリーズに登場したリスベット・サランデルを思い出してみよう。彼女はついに自身に付けられていた後見人の制度から自由になったのだ。その背景には「自分の生活を管理する権利、つまり銀行口座を管理する権利を人から奪うことは、民主主義の下でなされる最も侮蔑的な措置と言っていいだろう。(『ミレニアム1 ドラゴン・タトゥーの女』より)」という意識があった。これは福祉施策の外側からの視線に基づくものだ。そして「後見委員会には、後見の解除を求める申し立てをすべきかどうか、年に一度調査を行なう義務がある。(同書より)」というシステムが存在している。これこそが困難を抱えた人を障害者として護る社会福祉と、それが「人を障害者に差別してはいないか」監視する外側の視点が両立している姿に他ならない。

誤解の無いように書いておくと、日本でも基礎構造改革のおりにはフォーコーらの管理社会への警鐘と結びつく形で、社会福祉の改革への批判の声もあつた。そこでは障害者そのものが商品化される懸念も指摘されていた。しかしそれらはごく少数の声であり、ほぼ一過性の批判

にとどまってしまったのだ。そして残念なことに現在では社会福祉の内側での議論に終始している。人間が障害者にカテゴライズされることについての疑義などは見られない。国による福祉の報酬改定の時期になると盛り上がる、予算の奪い合いがメインとなっている。

今でも、福祉関係者が否かを問わず多くの日本人が、A君が障害者である以前に人間であり、親の子であるという事実に同意はするだろう。しかしその根拠は薄く、せいぜい「あたりまえじゃないか」と議論に終止符を打つのが関の山。酷な言い方をするなら、それは言葉だけの平等に過ぎないのだ。

繰り返しになるが、ここまでをまとめておく。

神が人を作ったように、人間社会が障害者を認定しカテゴライズしている。それによって社会福祉が成立し救われる人は多く存在するが、同時にそれは「人を障害者に差別する」という劣悪な非民主的行為でもある。この事実に気が付き、その非人間的な仕組みを看破する力の一つがスウェーデンにおいてはニーチェ以降の西洋哲学であったのではないか。神というか存在から離れて人間を知ろうとする哲学。その同じ方法で、人間社会によって貼られた障害者というラベルを剥がして本来のA君たちを人間として考え直す取り組み。それがこの連載で読んでいいる一連のミステリー小説が教えてくれているように思うのだ。

私たち日本人もまた、同様の方法で、あるいは日本人独自のやり方で、A君たちを人間として考える力を持つべきだろう。それを持って、社会福祉を外側から監視し続けなければならない。またそうすることで、社会福祉を、たとえば新自由主義のような困難から護ることができるのであろう。

最後になってしまったが、著者のラーシュ・ケブレルについて書いておく。『催眠』が出版された2009年当初、その著者についてはラーシュ・ケブレルというペンネームで呼ばれるだけで謎だった。後に判明するのだが、その正体はアレクサンデル・アンドリルとアレクサンドラ・コエーリョ・アンドリル夫妻。どちらも1960年代に生まれた作家である。

スウェーデンのミステリー小説界には他にも共同で執筆している作家がいてアンデシュ・ルースルドはベリエ・ヘルストレムと『制裁』『ボックス21』などを書き、ステファン・トゥンベリとは『熊と踊れ』などを共著している。またカミラ・レックバリの『魔術師の匣』はヘンリック・フェキセウスとの共著だ。このように二人で書いていることは珍しくないが、夫婦で、なおかつ単身のペンネームでデビューしているのは少ないのではないだろうか。

ラーシュ・ケブレルのミステリー小説

『催眠』 ヘレンハルメ美穂訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『契約』 ヘレンハルメ美穂訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『交霊』 岩澤雅利・羽根由訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『砂男』 瑞木さやこ・鍋倉僚介訳 扶桑社文庫

『つけ狙う者』 染田屋茂・下倉亮一訳 扶桑社文庫

『ウサギ狩り人』 古賀紅美訳 扶桑社文庫

『墓から蘇った男』 品川亮訳 扶桑社文庫

『鏡の男』 品川亮訳 扶桑社文庫

※2024年3月現在、筆者が確認した文庫版で入手可能な日本語訳を紹介している。

※※本稿執筆を一段落しかけたタイミングで、ラーシュ・ケプレルの最新作『蜘蛛の巣の罟』の邦訳が発行された。2024年3月の発行でまだ文庫化はされていない。この連載は学生でも手に取りやすいようにと考えて文庫になっている作品をテキストにしているが、本稿に深く関係する内容を含んでいるので、一箇所のみ引用し、紹介しておく。

ヨーナ・リンナがユレック・ヴァルテルとの最後の死闘の瞬間を思い出して語っているシーンだ。

「でもあの日、あの屋上で……ニーチェの引用をしたあと——あれそのものは、ただ最後の言葉を黒板に殴り書きしたに過ぎないようなものなんだが——奴はもうひと言囁いたんだ」

『墓から蘇った男』でのニーチェの引用は同書にとどまらず、ヨーナとユレックが描かれる作品を通しての重要なキーワードであるようだ。そしてそれがニーチェの引用であることは明かされたが、出典及び、肝心の「怪物と戦う者は……」の件については記されていない。

『蜘蛛の巣の罟』 品川亮訳 扶桑社